

## ホームシック？

4月最初の10日間は、その前半は晴れだが寒く、後半は雨模様でやはり寒くなかなか春の訪れを感じる事ができなかった。私の体調も必ずしも万全とは言えず、今頃になって慣れない異国の生活に若干の嫌悪感を感じ始めていたのかもしれない。5,6,7日と中国では清明節の連休だったが、街中に出かけても疲れが出てしまい、先の感冒の影響もあって宿舎に戻り休養するしかなかった。何とも曖昧な表現だが、要は一旦日本に帰りたくなったのだ。

日記には、4月10日(水)の放課後、国際教育学院の留学生窓口に行き、日本語を少し理解できる宋女史と話したと書いてある。そこで、留学を途中で中断するのは容易でないことがわかった。今回の中国滞在は、半年の修学ヴィザで来ていた。もしここで一旦帰国すると、このヴィザでの再入国は不可となる。ヴィザ発給までまた一からやり直しになる。せいぜい、7月初めの学期終了を前にして二週以上早く帰る必要があった時だけ、その足で中国へとんぼ返りする位しか、一時帰国は現実的でないとわかった。中国へは二週間だったら、ヴィザ無し渡航ができるからだ。

では何故帰国願望が芽生えたのか？きっかけは例の感冒だったと思う。体力が衰えて急に弱気になったのだ。そんな時、文化の違いなど慣れない生活に不満が出てきた。例えば、朝に飲んでいたレギュラー・コーヒーが、ここでは簡単には飲めなかった。中国の今は、コーヒーについてはインスタントコーヒーが普及しつつある段階だった。日本ではおなじみのレギュラー・コーヒーのドリップ・パックは入手できなかった。もう一つ、お風呂に浸かりたかった。それが中国ではできなかった。宿舎の部屋にはシャワールームがついていたが、バスタブはなく、体をゆったりとほぐす機会はなかった。学内に浴場もあったが、そこでもシャワーの個室を借りられるだけだった。そして何より、この地での食生活への不満が高じて来たのである。

多分私自身は、他人より中華料理が好きな方ではと思っている。しかしそれは、当たり前だが、日本人好みの中華だった。この地での中華料理は、日本のそれより大味で、しかも辛いものが多かった。留学の後半になって学食ではない校外の食堂に行っていくらか緩和されたが、味覚と言うのはなかなか妥協できない所があった。ある日、王老師と話していた時、私は「中国の中華料理ではなく、日本の中国料理が好きです」などと、顰蹙をかう愚痴をこぼしたものだ。

この間、日本の家族とは例の WeChat(微信)を使ってやり取りをしていた。妻には詳しいことは言わなかったが、窓口で帰国の相談をした頃、一旦日本に帰

るかもしれないと、発信していた。ありふれた食事だが、日本での家庭での食事を望んでいたのかもしれない。一種のホームシックにかかっていたのではないか？この話を松岡さんと、この月から私のクラスに参加した中島さんに相談すると、やはりここで帰国するのはもったいないからとどまるべきと、諭された。という経過で、この件はないことになった。熟年の先輩たちの言葉が効いたのだろう。

ところで、窓口で日本語ができる宋さんと話したのは、やはり中国語でのコミュニケーションが難しいことがあったと思う。中国語学習はまだまだ発展途上、やらなくてはならぬことがたくさんあるのではとっていたのだろう。そのストレスもあったに違いない。



4月に入ると寒さは残るものの、宿舎の周りにも少しずつ花が咲き始めた